

情報学教育における「重点項目」に関する考察

情報学教育フォーラム議長 松原伸一

1. はじめに

第2回情報学教育フォーラムの重点項目は、

(a)情報学教育における高大接続と連携

(b)文理融合の情報学

(c)高校で教えるべき教科「情報」の内容の3つといたしました。懇談会を効果的に進めるために、これらに関係して少しだけ問題提起をさせていただきます。フォーラムで、又はフォーラム終了後にもご検討願えれば幸いです。

2. 問題提起の一例

2.1 まず、基本事項として

各所にて何度も言及してきた事項ではありますが、改めて記しておきたいと思えます。

①教科教育としての情報学

情報学教育とは、自然科学系の内容だけではなく、人文社会系の内容をも積極的に取り入れ、いわゆる“文理融合でバランスのよい情報学”の教育のことである。これは、従来の情報教育の概念を発展させたもので、親学問との関連を考慮して、学習内容を明確化(再構成)する点に特徴がある。

ここで特記したいことは、初等中等教育に一貫した情報学の教育は、教科教育としての位置付けが求められている点である。つまり、小学校から高等学校までの12年間における学習内容としてのまとまりを示すことが重要で、必ずしも研究分野の情報学に一致するものではない。むしろ、私たち学校教育に関わる(関心のある)者が皆で協力して学校教育における学習対象としての“情報学”を確立したいものである⁽¹⁾。

②情報学を学習することの意義

この課題はいささか複雑である。つきつめれば、陶冶(die Bildung)なる「人間形成」の在り方に関係し、そこには、形式陶冶(formale Bildung)と実質陶冶(materiale Bildung)をめぐる議論が思いだされる⁽²⁾。

筆者は両方の考え方を肯定している。そして、特に、情報学教育に限定すれば、「教育の新科学化」及び「教育の新情報化」に加え、「教育の新国際化」という視点で、教職実践研究の立場で論じたいと考えている⁽³⁾。

2.2 重点項目について

①情報学教育における高大接続と連携

高大接続と連携の目的について、高校および大学のそれぞれの立場から考察したい。そしてそれが、高校教育および大学教育の充実につながり、理想を言えば、情報学に関心を寄せる者が増え、情報学の発展につながれば幸いであるが、・・・。

②文理融合の情報学

ここでの「情報学」とは、学校教育における「学習内容のまとまり」を示し、筆者は、「情報学修」という表現を使用している。

文理融合とは、学習内容のまとまりが、自然科学のみならず人文社会系などの広範な学問分野に依拠することを象徴的に示している。従って、高校の理系コース生徒向き、或いは、文系コースの生徒向きという考え方とは無関係であることを特記しておきたい。

③高校で教えるべき教科「情報」の内容

この重点項目はまさに前述の①および②の考察の結果として形成されるものであり、体系的な広がりの中で、教育学(教科教育学)の枠組みで説明されるべきで、それがカリキュラム(教育課程)と言える所以となる⁽²⁾。

3. おわりに

情報学の研究分野は広範におよび、それぞれが深遠なる学問の歴史を有している。筆者はこのような背景を尊重し、自然科学系のみならず、人文社会系や芸術系などのあらゆる分野の専門家の皆様の知見を拝聴し、濃厚な知識群の中で、教科教育の視点で、情報学の考察を施すことが重要であると考えている。そのためには、教科教育学の学問的な発展や充実が必須となるが、そのためにも、皆様のご協力を賜りたいと切に願っている。

参考文献

- (1)松原伸一：情報学教育の新しいステージ～情報とメディアの教育論～、開隆堂、2011.
- (2)吉田成章：学校カリキュラム構成論としての「一般陶冶(Allgemeinbildung)」論～ノイナーとクラフキーの比較を通して～、広島大学大学院教育学研究科紀要、第3部、第60号、pp.37-46、2011.
- (3)松原伸一：ソーシャルメディア社会の教育～マルチコミュニティにおける情報教育の新科学化～、開隆堂、2014.